Ⅲ章　各教科の取り組み

国 語 科

1　育成したい「思考力」

a　論理的思考力：ことばとそれが指し示す意味，ことばとことばの関係，ことばとその使用者について，既成の秩序の中で吟味する力
b　想　　像　　力：ことばとそれが指し示す意味，ことばとことばの関係，ことばとその使用者について，五感を通して得てきた知識や経験と結んで自分の考えを創造する力
c　言　語　感　覚：ことばの使い方の正誤，適否，美醜等について，直感的・感覚的に捉える力

a　「論理的思考力」とは

○　ことばとそれが指し示す意味において

そのことばの整合性を吟味することである。例えば『もうどう犬の訓練』（東京書籍，『新しい国語』三下）では，「『いっしょに町を歩く練習をします。』と，１か所だけ『練習』ということばが使われているが，これは訓練ではないのか。」「練習ということばには，訓練とは違った意味があるのか。」と，ことばのもつ意味の範囲と照らし合わせながら，ことばとそれが指し示す意味の整合性について吟味する思考である。

○　ことばとことばの関係において

順序や主張と根拠の整合性等，叙述相互の整合性について吟味することである。例えば，自分の意見を述べる際，「根拠として何を挙げればよいか」「事例としてふさわしいものは何か」と，話す内容を吟味するのがこの思考である。

○　ことばとその使用者において

そのことばの使用者の意図を捉え，その整合性について吟味することである。『森林のおくりもの』（東京書籍，『新しい国語』五）には，木が長生きであることを述べている部分がある。その部分について，「筆者が，読み手のよく知っている例を挙げているのは，読み手の納得を得ようとしているからだ。」等，筆者の意図について吟味することがこの思考である。

次に載せるのは，「論理的思考力」（ことばとことばの関係を吟味する力）の例である。

第５学年「メディアとの付き合い方について自分の考えを伝えよう －『テレビとの付き合い方』－」

【本単元で育成したい「思考力」】
筆者が使用している図と具体例の関係を捉え，筆者の意図について吟味する力

本実践では，メディアとの付き合い方についての意見文を書くために教科書教材『テレビとの付き合い方』から，自分の考えが相手に伝わりやすい文章の構成を考えていく。教材では，図が先に示され，具体例がその後で述べられている。しかし，図を先に示し，具体例を後に示した文章と，その逆の文章を比較すると，伝えたい内容によっては具体例を先に述べた方がよい場合もあることが分かる。図を先にすると，読み手が，図に具体例を当てはめながら考えられることや，具体例を先にすると，読み手が，具体例だけでなくさまざまな事象を図に当てはめて考えられること等に気付いていくのである。このようにして，その構成にした筆者の意図について吟味していくのである。

b　「想像力」とは

○　ことばとそれが指し示す意味において

一語・一文を知識や経験とつなぎながら自分の読みを創造することである。『かさこじぞう』（東京書籍，『新しい国語』二下）に「じいさまは，ぬれて　つめたい　じぞうさまの　かたやら　せなやらを　なでました。」という叙述がある。その一文から「じぞうさまは石でできているから，さわると，きっと氷のように冷たいよ。ぼくは，『じぞうさま，こんなにつめたくなってつらかろうにのう。』と，じいさまがじぞうさまを思う気持ちを考えたよ。」等と，「つめたい」という言葉とその意味を自分の知識や経験とつないで捉え，人物の気持ちを思い描くのがこの思考である。

○　ことばとことばの関係において

類似していることばや対比的なことばの関係を読んだり，文脈とことばの関係を捉えたりしながら，自分の考えを創造することである。『注文の多い料理店』（東京書籍，『新しい国語』五）には，「金文字→黄色な字→赤い字」のように色が象徴的に用いられている。これらを比較してその意味を生み出したり，紳士の心情の変化と重ねて捉えたりするのがこの思考である。

○　ことばとその使用者において

叙述を根拠に書き手・話し手の意図等をつかみ，自分の考えをつくり上げていくことである。物語の主題を捉えたり，説明文における筆者の主張を読み取った上で，関連する本や文章から得た知識と結んだり，自分の経験と関わらせたりしながら，自分の考えをつくり上げていく際に働くのがこの思考である。

次に載せるのは，「想像力」（ことばとその使用者において自分の考えを創造する力）の例である。

第３学年「俳句の世界へのとびらを開こう」

【本単元で育成したい「思考力」】

俳句のことばからそれが指し示す意味を捉え，情景を想像する力

俳句における情景には，句に描写された景色に作者の思いが映し出されている。従って，俳句に詠まれた景色を豊かに捉えていくことで，作者の思いに迫っていくことができる。例えば，小林一茶の「雪とけて村一ぱいの子どもかな」の俳句において，子どもたちは「雪とけて」や「村一ぱいの子ども」ということばを自分の知識や経験とつなぎ，「鬼ごっこをして楽しそうに遊んでいる子どもの姿」や「屋根から雪解け水がポタポタと落ちている音」等の景色を捉えていく。このように景色を豊かに捉え，春の訪れを喜ぶ作者の思いを想像する力である。

c　「言語感覚」とは

○　正誤

語の使い方や文の組み立て方について，言語規範に合っているか否かを直感的に判断・評価する能力。

○　適否

物事を適切に言い表しているか，場や相手にふさわしい表現か等，表現の妥当性や効果を直感的に判断・評価する能力。

○　美醜等

美しい・汚い，明るい・暗い，固い・柔らかい，重い・軽い等，あるいは軽快，重厚，優美，勇壮等，表現の微妙なニュアンスを直感的に判断・評価したり感覚的に味わったりする能力。

「言語感覚」（美醜等）に関わる「思考力」の例としては，次の実践が挙げられる。

第６学年「子ども句会を開こう」

【本単元で育成したい「思考力」】

俳句づくりにおいて，ことばを別の表現に変えたり，ことばの順序を入れ替えたりすることによって生じるニュアンスの違いを直感的に感じ取る力

俳句では，その短さゆえに，一つのことばの役割は大きい。また，ことばの順序も句のイメージ形成上，重要である。本単元では，そのような俳句の性格を生かし，句中のことばを類似することばに入れ替えたり，順序を入れ替えたりすることで生じるニュアンスの違いを感じ取っていく。

例えば，「手紙書くいっしょにとどけ虫の声」と「手紙書くいっしょに入れたい虫の声」とを比較して両者の語感の違いを感じ取ったり，「百ぴきが同じ向き飛ぶ赤とんぼ」と「赤とんぼ飛ぶ百ぴきが同じ向き」のようにことばの順序による句のイメージの違いを感じ取ったりする力が，「美醜等を捉える言語感覚」である。